

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

今年1月にスキージャーナルから出版された、丸山庄司さんの著書「岳に抱かれ生涯極楽スキー・一途に一本道、一途に一事」を

読む機会があった。月刊スキージャーナルのコラム「遠き思いで・近き夢」、さまざまに展開されるスキーに関する歴史場面だ。

丸山庄司さんは、昭和8年に、山岳ガイドをしていた父の経営する民宿に生まれ、競技スキーでは日本のトップクラスで活躍、全日本スキー連盟の初代デモンストラーターとして認定され、スキー指導者として指導に当たった。現役後は教育本部(基礎スキー)、強化本部(競技スキー)の両分野の要職と専務理事を歴任したスキー界では知らぬ人はいな

い功労者だ。長野冬季オリンピック招致やアジア各国とのスキー交流にも貢献、平成19年の叙勲で旭日双光章(スポーツ振興)を受章された。著書は、6章構成。まさしく日本のスキー史そのもの

学させ、1か月間研修させたことだ。本隊45名の視察団が訪れた時には、「スキーは自然との対話」である事を忘れ、箱庭のような小さな斜面でフォームにこだわりの、技術追及するのではなく「スキーは

徒を導き、上達させる義務がある、と再認識した先遣隊に報告させた。とかく視察は、聴き手側。視察効果が得られないことが多い中、先駆的な積み重ねが、八方を世界的なスキー

国際的スキーエリアとして認知させるため何が大切か考えてみませんか

だ。ぜひ多くの人に読んでほしい。

「白馬のスキー指導者・オーストリアに学ぶ」で、世界をリードするスキー技術を学ぶために、先遣隊として5名をオーストリア国立スキー学校に特別入

自然の中のスポーツとすることを忘れてはいけない」、その次に大切なことは、指導者はスキー技術を理解し、それを生かして、生徒の技術レベルや、斜面の雪の条件に合わせた指導法を組み立て、生

場としている原動力なのだろう。白馬村にとっても、丸山庄司さんの国際的な認知度や見識で支えていたたい事が多かった。国内外のスキー競技会の開催には、シーズンカレンダーに入れてもらう

難題があったが、国際スキー連盟や全日本スキー連盟との調整でも、「丸山庄司さんから内容は聞いているよ、早速本題に入ろう」との言葉は、本当に有難かった。歴史を語

る、多くのスキー関係資料を、ぜひ多くの人達にこれからも伝えてほしいと願っている。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



地元での国際スキー教育会議の開催がスキー発展に必要と丸山さんの情熱が語りかけてくる